

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

The Labour Year Book of Japan special ed.

第二編 兵力・労働力の動員とその配置

第五章 主要産業における労働力需要事情と労働移動

第三節 鉄鋼業

太平洋戦争開始以来の鉄鋼業における労働者数の推移を、普通鋼部門についてみると次のごとくである。

普通鋼労働者数(鉄鋼統制会調べ)

| 年 | 月 | 期末現在労働者数(人) | 同上指数 |
|-------|-------|-------------|-------|
| 一九四一年 | 一二月 | 125,457 | 100.0 |
| 一九四二年 | 六月 | 134,311 | 107.1 |
| " | 一二月 | 143,859 | 114.7 |
| 一九四三年 | 六月 | 169,673 | 135.2 |
| " | 一二月 | 210,106 | 167.5 |
| 一九四四年 | 六月 | 212,360 | 170.1 |
| " | 一二月 | 192,929 | 145.8 |
| 一九四五年 | 八月一五日 | 178,342 | 142.2 |
| " | 八月 | 121,635 | 96.9 |

(注一)特殊鋼労働者数は一九四四年一二月末一一九、七八一人、一九四五年八月一五日一一四、五九四人、同八月末四六、六八三人。

(注二)一九四一年後半から四二年初めにかけて著しい鉄鋼不足を生じ、それを緩和するために一連の統制手段がとられた。この統制手段は一九四一年一二月までいろいろと変更をみたが、最終的な方式が具体化したのは、同年一月日本鉄鋼統制会設立の後であった。当時、銑鉄一貫会社、製鋼会社、単純圧延会社の主なるものはいずれも鉄鋼統制会の傘下にあったのであり、そのほかに最も大きな分野を占めるものに特殊鋼製造業があり、また小規模のものとしては鍛鑄鋼フェロアロイ、小型熔鋳炉等による銑鉄協議会系統の工場があったが、これらは鉄鋼業全体よりみてその労働力需給状況の趨勢をうかがうには大して影響がないので、以下では、主として鉄鋼統制会の資料および鱸平亮「鉄鋼業労働事情」(「社会政策時報」第二七二号、一九四三年五月所収)によって普通鋼部門のみについて述べる。

すなわち、一九四一年一二月末の労働者数を一〇〇とした、一九四二年一二月末の指数は一一四・七であり一四・七%の増加を示しているが、その内訳を検討してみると、四、五月ごろに雇い入れた小学校修了者による三・七%増、朝鮮人訓練工の移入による三・三%増を含んでいるので一般青壮年者の増加は七・七%にしかならなかった。一方、第16表でみると、毎月の雇入れに対する解雇率は少なくとも三六%、多きは一〇〇%以上の比率を示し移動の激しかったことを物語っている。それは、今日に比べて鉄鋼労働における高熱重筋作業の比重が当時においてははるかに高く、折角就業したものの他の軽易なもしくは技術的産業部門へ移動するものが多かったのと、同じく重筋作業ではあるが、作業状態が間欠的で比較的自由であり、かつ高賃金の得られるいわゆる人夫稼ぎに流出するものが多かったためである(前掲適正賃金をめぐる三つの座談会)による)。

製鉄工場労働者——わたしの方は作業状態が製鉄関係だけに熟練工が二人なり三人なり

一つの職場にゐるとその他の者は半島人をつれてきても一〇〇疋上げるのを八〇疋乃至七〇疋上げればそれでもできるといふ仕事の状態ですから、賃金と技術、熟練との関係といふことにおいて非常に開きがあるのです。さうして熱作業だけに地方へ行つて嘘をいつて連れてきても余りに労働の強度が高いために耐へられないといふので、入るより出る人の方が多いといふ状態が続いてゐるのです。それから賃金と作業熱意に対する影響、これが大いにあつて、わたしを標準をしてお話しすればわたしは一八年ばかりくつついてをりますけれども今日の収入がまづ二二〇円です。それで田舎から連れて来られた人達の収入といふものはまづ四七～八円から五〇円、それが二二～三歳から二四～五歳位の盛に働ける歳の人です。ですから賃金よりも押付けられる仕事の率の方が高いから辛抱ができないといふことになる。何時でも不熟練工が多くゐるからそれだけ災害の率が高い。

〔製鉄の方を出ると多くどういふ方面に行きますか〕田舎にも多く帰りますね。〔それからこつちではどういふ方面に行きますか〕やはり製鉄工場のやうなものがこの節では幾つもありますから、そんな処に行くのです。甚だしい人は人足をした方が製鉄所よりも寧ろ金になるといつて人足になる人がある。夜勤の人などは賃金が少いので夜会社に行つて労働してきて、昼間人足に出て働く……、秋田でも最近の話に炭を焼くものが普通一日五円、よく働くと八円取るさうです。一五、六から一七位までの者が一円八〇銭から二円取るさうです。だから殊に製鉄の様な体力を主とする処は収入にならなければ直ぐ国に帰つてしまふ者がありませうな……、力仕事でしかも熱作業なので労働は可なり激しい……。

したがつて身体にこたへるから休む率が多くなる。〔さうすると移動はずゐぶん激しい訳ですね〕ですから五〇人来れば六〇人出るといふ訳になる。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

発行 1964年

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 東洋経済新報社

2000年2月22日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態【目次】 次のページ → ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
